

ウバイド期に関する国際研究集会

小泉 龍人

International Workshop on the Ubaid Period

The Ubaid Expansion? Cultural Meaning, Identity and Integration in the Lead-up to Urbanism

Tatsundo KOIZUMI

キーワード：ウバイド、エクспанション、地域性、複雑性、都市化

Key-words: Ubaid, expansion, regional manifestation, complexity, urbanization

ウバイド研究の経緯

ウバイド期は、西アジアで新石器時代に食糧生産経済が定着したのち、銅石器時代に都市化が進行する途上であり、都市出現過程の研究において重要な時期である。1920年前後に、イラクのユーフラテス川下流域にあるテル・アル・ウバイド (Tell al-Ubaid) で、輪積み成形の鈍黄色を呈した彩文・無文土器が住居址で発見された。同遺跡が指標となり、こうした土器、それを伴う時期、さらにはそれに関連する文化を総称して「ウバイド」という用語が使われるようになった。ウバイド文化の研究は、土器・建築・墓制・祭祀・交易など多岐にわたり、とくに1988年にコペンハーゲン大学で開かれたウバイド期に関する国際シンポジウム (Upon This Foundation: The 'Ubaid Reconsidered) を一つの画期としてきた (Henrickson and Thuesen 1989)。同シンポの総括では、ウバイド文化について技術・生業・墓制・交易など多様な側面が討論され、土器・建築物・墓・集落などの考古資料を用いてウバイド社会をどのように解明していけば良いのかという問題定義がなされている。

コペンハーゲンでのシンポジウム以降、西アジア各地でウバイド期の遺構・遺物があまた確認されてきた。同時に、ウバイドに後続するウルク期に関する考古資料もさらに増えてきた。都市形成期の研究動向としては、むしろウルク・エクспанションやウルク・ワールド・システムといった議論が脚光を浴びてきたのに対して (cf. 小泉 2002)、都市形成に向けた助走段階に相当するウバイド期そのものの議論が前面に出る機会は少なかった¹⁾。その最大の理由は、先史時代の遺跡を掘ると当たり前のように顔を出すウバイド土器の膨大な量と、土器をはじめとする物質文化の独特な均質性があると推察される。どこから切っても違いが見えにくいウバイド文化をどう解きほぐしたら良いのか。フィールドでつねにこの課題が意識されてきた。

ダーラム研究集会の位置づけ

今回のウバイド期に関する国際研究集会は、「ウバイド・エクспанション? 都市化へ向かう文化的意味、アイデンティティ、統合 (The Ubaid Expansion? Cultural Meaning, Identity and Integration in the Lead-up to Urbanism)」と題され、2006年4月20～22日にイギリスのダーラム大学グレイ・カレッジで開催された。同大学のR.カーター (Carter) とG.フィリップ (Philip) がホスト役を務めた。日本からは本会会員の小泉・須藤寛史・下釜和也が参加し、マンチェスター大学に留学中の前田修も現地合流した (敬称略)。ダーラムでの研究集会の主旨説明は以下の通りである。

先のコペンハーゲンで開かれたシンポジウムから16年経過した現在、北メソポタミア、とくにシリアとトルコにおいて多くの発掘やサーヴェイが実施されてきた。その結果、北方におけるウバイド (the Ubaid)²⁾の詳細な証拠が増えてきた。同時に、湾岸での調査の進展により、南メソポタミアと湾岸の海上交易を通じた結びつきに関する情報も充実してきた。さらに、イラン西部および海岸部とのつながりも重要であり、近年のイランにおける共同プロジェクトの増加によりウバイドをめぐる議論に厚みが増しつつある。そこで、本研究集会の目的は、こういったウバイドに関する豊富な情報を整理・統合して、ウバイドの定義確立を試み、ウバイド期の編年的枠組みを更新して、ウルク期に実を結ぶ諸傾向 (都市化あるいはウルク・エクспанション) の起源を探ることにある。

研究集会の開催前の段階 (2004年9月末) では、テーマ構成案は4つに分かれていた: 1) 南メソポタミアのウバイド (the southern Mesopotamian Ubaid)、2) ウバイドの地域性 (regional manifestations of the Ubaid)、3) ウバイドを捉える理論的視座 (theoretical perspectives on the Ubaid)、4) データの統合と表現: 銅石器時代ウェブサイト立ち上げに向けて (data integration and pre-

sentation: towards a Chalcolithic website)。しかし、実際に研究集会のプログラムが組まれた段階(2006年4月初頭)では、上記4テーマは3つに修正されていた: 1) 変容、統合、複雑性 (transformation, integration and complexity)、2) ウバイドの地域性 (regional manifestations of the Ubaid)、3) ウバイドの諸側面 (aspects of the Ubaid)。計24本の発表のうち2)のテーマが全体の約2/3を占めていた。つまり、当初主催者は、理論・モデルと調査報告のバランスを取った案で発表者を募ったものの、蓋を開けてみたら「ウバイドの地域性」を主眼とするフィールドからの声が圧倒的多数だったのである。こうした点がウバイド研究の現状を如実に物語っている。以下、印象深かった発表を筆者の独断と偏見で紹介してみる。

おもな発表内容

1) テーマ「変容、統合、複雑性」

G.スタイン (Stein) は、“Horizon Styles, Ideal Types, and Cultural Identities: Modelling Regional Variation in the ‘Northern Ubaid’”という表題で発表した。ウバイド期の政治組織は周期的な首長制 (cycling chiefdoms) であり、食糧財の儀礼的運用 (ritual mobilization of staple finance) や特化された聖なる知識 (specialized sacred knowledge) にもとづく首長制であったと主張している。そして、物質文化のさまざまな面において前5千年紀末にウバイド様式が徐々に消えていき、在地様式が再出現するとしている。一例として、南東トルコのディルメンテペ (Degirmentepe) 7層の考古資料は純粋なウバイド後期というよりはハイブリッドであるという。この見解は、同層の土器が過渡的な様相 (ウバイド終末期) を呈するという拙論につながる (小泉 2001: 135-136)。

S.ケルナー (Kerner) の発表 “Ubaid and the Late Chalcolithic: craft specialisation and social complexity” は、南レヴァントにおけるウバイド併行期の専業生産 (specialised production) についてであった。彼女によると、専業の度合いは、特定の製品をめぐる生産者と消費者の関係や、専業生産に費やす時間と総生産 (general production) にかかる時間との割合で決まるとしている。そして、前5千年紀後半の南レヴァントでは個人的な富の証拠は見当たらないが、ナハル・ミシュマル (Nahal Mishmal) では銅製品などの威信財的な遺物が存在していることから、すでに社会経済的な格差が出現していたのではないかと推定している。とくに銅製品 (棍棒頭、スタンダード、バスケットなど) は従属専門工人 (attached specialists) によって専業生産されており、独立専門工人 (independent specialists) による一部の土器生産とは異なるとしている。さらに、在地産と違って外来産の銅鉱石はヒ素

やニッケルを含み硬質であったことから、こうした銅鉱石は特定の集団のもとに限定的に輸入され、銅製品の生産が管理されていた可能性も指摘している。この主張は前5千年紀後半の南レヴァントにおける社会変容に関して興味深い視点を提供してくれているが、シリアや北メソポタミアではウバイド後期よりもむしろウバイド終末期以降にヒ素銅が普及する様相と比較できそうだ (cf. Ryck et al. 2005; Yener and Wilkinson 2007)。

本研究集会の共同主催者の1人であるカーターは、“Diverse interactions in the Persian Gulf region during the Ubaid Period”という題で、湾岸での調査成果にもとづきながらメソポタミアの影響を受けた湾岸地域の文化変容について論じた。彼によると、湾岸で出土する土器のおよそ3分の2以上は搬入されたウバイド土器であり、彩文土器伝統に欠ける在地文化にとってウバイド彩文土器そのものが価値ある品物として交換されていたと推論している。また、アブダビ西方の遺跡 (H200?) では、ウバイド2期 (ハッジ・ムハマッド期) の土器片が採集され、南メソポタミアと湾岸をつなぐ最古級の資料であるという。他方、イラン西～南西部では、中期スシアナ2期 (ウバイド2期併行) の頃からウバイド系土器と在地系土器の間に共通した彩文モチーフが現れ、中期スシアナ3期 (ウバイド3期併行) の段階で多様化する傾向を示すことから、メソポタミアのイラン地方との関係は湾岸のそれとは異なるとしている。さらに彼は、ウバイド併行期のイラン西～南西部にかけての鈍黄色土器の分布を “Middle Chalcolithic Buff Ware Horizon” と呼んだらどうかと提案している。

2) テーマ「ウバイドの地域性」

S.ポロック (Pollock) は、“Practices of Daily Life: Pottery and Food Consumption in Ubaid-period southern Mesopotamia and Iran”という題目で発表した。彼女は、南メソポタミア (中部イラク) のテル・アバダ (Tell Abada) やテル・マドゥフル (Tell Madhhur)、南イランのタル・イ・バクーン (Tall-i Bakun) などの居住コンテキストで出土した土器をもとにして、日常の調理や食事の場面で使われる土器の機能を比較分析している。たとえば、マドゥフルやアバダでは調理・配膳といった食事の準備に使われたであろう土器が目立つのに対して、バクーンでは飲料用の多さと貯蔵用の少なさが前二者と対照的であるという。さらに彼女は、日常生活用品としての土器の機能は口径 (口縁部直径) の大小に反映されていたとしている。アバダでは口径15cm前後の土器が飲食用に使われ、マドゥフルでは口径15cm以上の土器が調理・貯蔵に用いられたらしい。こうした調理や食事の場面で使われていた容器の相違には、各遺跡における動物利用をはじめとした生業



写真1 ダーラム大学、オリेंट博物館



写真2 ダーラム城

経済の多様性が絡んでいるようだ (Pollock 1999: 81-84)。

須藤は、北シリアのテル・コサク・シャマリ (Tell Kosak Shamali) での発掘成果をもとに、“Wool Production at Kosak Shamali, northern Syria”という題で発表し、紡錘車をもとにした毛織物生産の変遷について議論した。本遺跡ではウバイド期からウルク期にかけて紡錘車の重量が軽くなっていく傾向があるらしい。彼によると、民族誌などの情報をもとに、重い紡錘車は亜麻のような長繊維向きで、軽い紡錘車は羊毛のような短繊維に適しているという。こうした変化の背景には、ウルク期に毛織物の品質と生産が向上しただけでなく、ヒツジやヤギの肉に代わって羊毛や乳のような二次生産品への需要が高まったと推定している。

H.ハマード (Hammade)・山崎やよいは“An Aspect of the Ubaid Intrusion on the Syrian Upper Euphrates”という表題で、彼らが長年にわたり取り組んできた北シリアのテル・アバル (Tell al-‘Abr) における調査成果の一部を披露した。層序にもとづき4つの文化層 (Stages I-IV) に分け、ステージごとに器種構成の変化を整理している。たとえば、ステージIIにおいて胴部下半が削られた鉢 (scraped bottom bowl) が出現し、玉縁口縁 (beaded rim) や彩文をしばしば伴うという。そして、ステージIVで同器種中の無文タイプが頻出して彩文タイプが減少する背景として、彩文土器の儀礼的な利用を想定している。

B.パーカー (Parker) の発表“The Northern Ubaid: A View from the Tigris Piedmont”は、トルコ南東部におけるティグリス川上流域のケナン・テペ (Kenan Tepe) の調査概報であった。彼によると、本遺跡は他の北方ウバイドの遺跡と同様に、外部集団と関係をもちながら在地独自の発展経過をたどっていたらしい。特異な遺構の一つとして、レンガ列を伴う土壙墓が発見されている。これは、北シリアのカシュカシヨクやマシュナカなど北方ウバイド諸遺跡で確認されていた「地下式横穴墓」と同系統に帰属しており、筆者の唱える南北ウバイドの墓制分布の傾向にほぼ符合する (小泉 2001: 25, 図7)。さらに、ケナン・テペでは、円文がネガティブに彩色されて目玉状の意匠を表す土器片も報告された。これは、北方ウバイド文化に特徴的である「目の文様」の一例と見受けられ、ユーフラテス川上流域からティグリス川上流域にかけて広がる祭祀ネットワークを示唆する貴重な手がかりといえる (小泉 2001: 107-109, 図41)。

筆者は、“The Ubaid Pottery Sequence from Tell Kosak Shamali on the Syrian Upper Euphrates”という題目で、コサク・シャマリで出土した銅石器時代 (ウバイド～ウルク期) の土器資料の製作技術的な変遷について発表した。現在、本遺跡の最終報告書は作成中であるため、

調査隊の公式見解としてではなく、あくまで個人的見解として論じた。詳細は同報告書に執筆中のため、現段階で本研究集会議事録への投稿は控えている。なお、北シリア～メソポタミアにおける全般的な土器製作技術の変遷については、別稿に記してある (小泉 2006)。

H.ファゼリ (Fazeli)・R.マシュー (Matthews)・C. L. トフトマーケン (Tvetmarken) の発表“A comparative investigation of craft specialization and cultural complexity during the Late Neolithic/Chalcolithic Periods in the Qazvin and Tehran Plains (Iran) and Mesopotamia (Iraq)”において、前半はテヘラン南方にあるテペ・パルディス (Tepe Pardis) でのイラン・イギリス合同調査の概報であった。ファゼリによると、前5～4千年紀の層位から、1.1mの高さが残る昇焰式土器焼成窯が検出されている。また、本遺跡では、前4千年紀にロクロ成形が導入され、大量生産が開始したという。ただ、該当期の土器がいわゆる高速ロクロ回転により水挽き成形されていたのかは不明である³⁾。後半の発表では、テペ・ガウラ (Tepe Gawra) で出土しているドア封泥が再検証された。マシューによると、ドア封泥はおもに貯蔵コンテキストから出土し、居住コンテキストからは認められず、ガウラ XIII 層 (ウバイド後期) に初現するという。ドア封泥の初現時期に関して、かつてマンチェスター大学で行われたウルク期のシンポジウム“Artefacts of Complexity”でのS.ロスマン (Rothman) の発表内容と異なる (cf. Rothman 2002)。マシューに質問したところ、ガウラ XIII 層に初現したとされるドア封泥はいずれも井戸から出土しているが、実はこの井戸の帰属時期は不確かなままである、というなんとも微妙な答えが返ってきた。ちなみに、彼がイラク博物館でガウラ出土のドア封泥を観察記録したノートは手元がなく、バグダッドにあるらしい。

研究集会寸評

本研究集会に参加して筆者が最も強く感じたのは、今後のウバイド研究のためにはアバダやガウラといった旧世代の調査成果に頼ってしまう現状から脱却しなければならない、という点であった。とくにセトルメントパターンを論じる際、相変わらずアバダやガウラが軸に据えられている。たしかに、こうした広大な面積を発掘した成果は、ウバイド期の集落構成を比較分析する上で有効である。しかし、近年になってシリアやトルコなどにおける小規模区画の調査成果が累積し、資料記録法も格段に進展してきたため、旧世代の調査手法により得られた考古資料を同じ土俵で絡めることが難しくなりつつある。そこで、ウバイド期の集落を空間コンテキストに留意しながらより広い調査区を発掘し、出自の確かな資料をもとにして集落構成や空間利用

を議論していく戦略が求められる。とりわけウバイドの発信源である南メソポタミアにおいて大規模な発掘の再開が待たれるが、そのためにはイラクの平和が不可欠であることは言うまでもない。

同時に、社会の複雑化を紐解くためには、研究対象とする考古資料の時間軸上の位置づけを再検証する必要性も改めて実感した。考古学的議論の入口に立ったとき、扱う資料の時間的位置づけを適切な状態に整理しておく作業は不可欠である。ところが、今回の発表を聴いてみると、考古資料の帰属時期を十分な根拠で定めぬままに先を急ぐ展開も散見された。とくに、ウバイドからウルクへの移行期において、社会がいかに変貌していくのかを語るためには、まずなによりも考古資料の時期指定が必要である。これまでウバイド期の編年は、おもに土器の形式と文様にもとづく慣習的なものだったが、各地域に溢れる土器資料を適切に序列化しきれていないのが実情である。個人的には、地域をまたいで汎用できる基準（製作技術など）を積極的に導入した修正編年の構築を目指している⁴⁾。このねらいは、本研究集会の総括で議論された「銅器時代ウェブサイトを上上げてデータベースを構築する」指向と十分に協調可能である。

さらに、こうした考古資料の時間的位置づけを適切に処理した後で初めて生きてくる、専門化の見極め、特定資源へのアクセス権の検証、社会格差の認定基準といった諸議論の進め方にも課題が残る。たとえば、土器生産の専門化は、土器そのものの変遷だけでなく、工房の稼働時期が季節に限定されていないのか、焼成温度の管理技術が熟練しているのか、消費地までの流通経路が確保されているのか、といった諸側面も総合的に勘案してようやく捉えることができる。くわえて、専門工人が独立なのか従属なのかといった基準も、研究者によって解釈が分かれるので聞き手は注意を要する。また、貴重な資源など価値のあるモノへのアクセス権や所有権を証明するのも至難の業だ。モノの価値の優劣は、入手しにくいかどうかといった点が一つの手掛かりになっているものの、決定打ではない。そして、こうしたモノから個人（所有者）まで辿り着くには、まずは墓制の比較検証が鍵を握っている。さらに、モノから得られた多様な違いを社会における格差へ昇華させるためには、より多くの事例検証をこなしながら議論を重ねていかねばならない。

本研究集会の発表を通して、やはり理論やモデルを前面

に出す議論は聞こえず、どこで何が出ているのか、といった事実確認に最も関心が集まっていたようだ。「ウバイドの地域性」というテーマに発表が集中していたのもうなずける。イラクでの調査再開の見通しが立たない現況では、近隣地域での調査が当該研究を主導する流れはしばらく続いていくであろう。

註

- 1) ウバイド期に関連した集会の一つとして、2001年11月にリヴァプール大学で「近東における前5千年紀」“The fifth Millennium BC in the Near East”という国際会議が開かれている。
- 2) 本研究集会で使われていた‘the Ubaid’は、広義の「ウバイド文化」と捉えて良いだろう。本稿では「ウバイド」と表記しておいた。
- 3) 北シリア～メソポタミアにおけるウバイド土器に関するこれまでの筆者の観察所見では、ウバイド期に普及していた「粘土紐輪積み+回転台仕上げ」が進展し、ウバイド終末期（前4千年紀初頭）に「低速回転ロクロ」が成形段階に部分導入される（小泉 2006: 6-9）。はたして拙論がイラン地域にも当てはまるかどうかは別に、テペ・パルディスでの土器製作技術の変遷は興味深い。
- 4) 本研究集会にて、筆者はその見通しを一部披露したが、先述の通り詳細についてはコサック・シャマリの発掘報告書に譲りたい。

参考文献

- Henrickson, E. F. and I. Thuesen (eds.) 1989 *Upon This Foundation: The 'Ubaid Reconsidered*. Proceedings from the 'Ubaid Symposium, 1988, The Carsten Niebuhr Institute of Ancient Near Eastern Studies, Publications 10. Copenhagen, University of Copenhagen.
- Pollock, S. 1999 *Ancient Mesopotamia: The Eden that Never Was*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Rothman, M. S. 2002 Tepe Gawra: Chronology and Socio-Economic Change in the Foothills of Northern Iraq in the Era of State Formation. In J. N. Postgate (ed.), *Artefacts of Complexity: Tracking the Uruk in the Near East*. Iraq Archaeological Reports 5, pp. 49- 77. Warminster, British School of Archaeology in Iraq.
- Ryck, I.De, A.Adriaens, and F. Adams 2005 An Overview of Mesopotamian Bronze Metallurgy during the 3rd millennium BC. *Journal of Cultural Heritage* 6: 261-268.
- Yener, K. A. and T. J. Wilkinson 2007 *The Amuq Valley Projects: 1995-96 Annual Report (Revised)*. Chicago, The Oriental Institute of the University of Chicago.
- 小泉龍人 2001『都市誕生の考古学』世界の考古学 17 同成社。
- 小泉龍人 2002「ウルク・ワールド・システムの彼方」小泉龍人編『大会報告「ウルク・ワールド・システム」』『西アジア考古学』3号 67-73頁。
- 小泉龍人 2006「古代西アジアの土器製作技術－文化の拡散経路と都市化－」『国士館考古学』2号 1-21頁。

小泉 龍人

早稲田大学

Tatsundo KOIZUMI

Waseda University